

# 平成20年度 読書感想文コンクール

角館図書館後援会主催の平成20年度読書感想文コンクールが行われ、小中学校の部合わせて71点の応募がありました。その中から西宮李奈さん(角館中学校1年)の「命の大切さ」が最優秀賞に選ばれました。入賞者と最優秀賞作品を紹介します。

## 読書感想文コンクール審査結果 (敬称略)

【最優秀賞】 西宮李奈(角館中学校1年)

【優秀賞】 森田晃弘(角館小学校2年) 青山桃子(角館小学校6年)

- |          |    |   |
|----------|----|---|
| 小学校下学年の部 | 入選 | 加藤南美(角館小2年)   |
|          | 佳作 | 佐々木蓮(中川小2年)・菅原桃音(角館小2年)・仙波菜々子(角館小3年)                            |
| 小学校上学年の部 | 入選 | 青山英恵(角館小4年)・藤村愛美(角館小4年)   |
|          | 佳作 | 高橋杏一(中川小5年)・藤川颯人(中川小6年)・山田風花(角館小6年)<br>鎌田日花理(角館小6年)・己野莉沙(角館小6年) |
| 中学校の部    | 入選 | 布谷咲(角館中2年)  |
|          | 佳作 | 石郷岡美穂(角館中1年)・大木貴嗣(角館中2年)<br>戸澤さやか(角館中3年)                        |

## 最優秀賞作品

### 『命の大切さ』(図書:「3日の命を救われた犬ウルフ」) 西宮李奈



「子犬であろうと成犬であろうと、そして飼い主が代わろうとも、人間がちゃんと愛情をかけてやれば、犬のほうだって、ちゃんと応えてくれる…。犬とは、そういう動物なんですよ…」という言葉に心を打たれました。

全国の動物管理センターあるいは保護センター、愛護センターとよばれる「処分施設」には毎日、処分される運命の「命」が運ばれてきます。今日もまた、白いハスキーの子犬が運ばれてきました。「3日の命を救われた犬ウルフ」という本は動物の命の行方をみんなも一緒に考えてほしいと伝えているような気がします。

わたしがこの本を読んで、飼えなくなった犬や猫を保健所が引き取り、安楽死処分することについて、秋田県内で「かわいそうだが仕方がない」や「処分は当然」と思う人が半数以上いる事に驚きました。

処分や子犬・成犬の譲渡会を担当する保坂繁さんの気持ちがよくわかります。保坂さんはきっと、世の中で処分する数が増えていく中で飼い主になる責任として、人間と動物のいい関係を保つには、犬の事をよく知り、きちんとしつけをすることが大事なんだということと、ペットを飼育する飼い主の責任の重大さというのを教えたいて考えていたのだと思います。

わたしは、この本を読んで、いろいろな事を考えました。

まず、安楽死処分の事についての秋田県の人々の反応です。秋田県が行った調査で、飼い主の勝手な理由で保護センターなどに引き取られ、三日間の期間が過ぎるとガス室で「人間の手」によって処分されることについて調査に答えた秋田県の人々は「かわいそうだが仕方がない」と答えていました。かわいがってきたペットを、なんらかの理由で手放したり、もらい手が見つからないから、保健所に引き取ってもらったりする事を、しょうがない事だと考えている人が半数を超えているのです。かわいがっていても飽きたり、思ったより手がかかるからと、ペットを捨てる人達。なぜ?どうして?著者と同じようにわたしにも理解できませんでした。

次に、秋田県の殺処分の数の事です。秋田県の殺処分の数は犬・猫を合わせると、一年間に三千匹を超えるそうです。さらに

全国では、なんと五十万匹にも上るそうです。またしても、なぜ?と疑問はふくらむばかりでした。

この本を読むことによって、わたしは、以前に、ネザーランド・ドワーフという小柄なウサギを「かわいいから」という理由で飼い主としての責任の重大さも知らずに飼い始めたことを思い出しました。もちろん愛情もかけて、最後までしっかり、家族の一員として飼育するつもりでした。しかし、思っていたより飼育が難しく、最初は他の二匹のウサギと別々に食事をしていましたが、「もう大丈夫だろう。」と思って、二匹のウサギと一緒にしました。だが、他の二匹のウサギと何日か食事を与えていたら、自分の食べたい量の餌が食べられず死んでしまいました。死んだ時わたしは、「もっと大きく成長するまで別々にしておくべきだった。満身に育ててやれなくてごめんね、自分で飼い始めて、自分勝手な判断でこんな事に…本当にごめん。」と悲しい気持ちと申し訳ない気持ちでいっぱいでした。その時、わたしは、「かわいい」からという理由だけじゃだめなんだという事に気がきました。命とはなんなのか。その日から、深く考えるようになりました。そんなときに、たまたま、テレビである保護センターの中での安楽死について放送されていました。その取材に答えてくれた人が「安楽死という殺処分で失われていく多くの命に、自分になにができるのかを考える事は、とても大事な事だと思います。」という言葉にわたしはピンとききました。自分勝手な理由で飼い始めたあの頃、人間の過ち・判断で動物の命を奪ってしまった事、自分の過去の過ちを思い出しました。殺処分というやり方で命が失われていく事を知りながらも保健所へ置いていく人達のこと思い出しました。そして、自分にできる事からはじめる事こそ大切なんだということが分かりました。偶然見た、テレビを通して、命の価値というのでも理解できました。それは、人間と動物の命の価値は平等だという経験をしたと思います。

私は、この本を読んで動物を飼う時の責任と、自分達の軽い気持ちや勝手な理由で動物を飼ったり、捨てたりしてはいけないということを知りました。今後、以前の経験を生かして身近にある命を大切にしながら生きていきたいです。